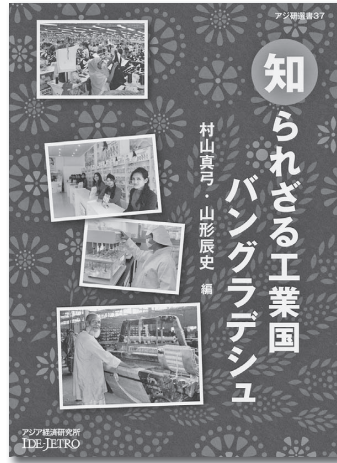


村山真弓・山形辰史編 『知られざる工業国バングラデシュ』

アジ研選書二七、アジア経済研究所 二〇一四年



バングラデシュは農業国である。主要産品は米とジュートと知られている。バングラデシュは漁業国でもある。大きな川魚が主要なタンパク源である。エビも重要な輸出品である。

しかし、いくつかの側面からみると、バングラデシュは既に工業国なのである。多くの読者にとって意外であろう、このバングラデシュの工業国としての側面を伝えるために、本書を出版した。工業の中心は、衣類や靴といった労働集約的製品、そしてジュート製品や食品といった一次産品加工製品であるが、それらに加えて、家電や造船、バイクや自転車、医薬品といった製品へも、工業化の広がりがみられる。さらには、IT関連サービスやスーパーマーケットビジネスといったサービス産業にも顕著な展開がある。このように、最貧国と呼ばれて久しいバングラデシュに、「知られざる」産業発展の確かな手がたえがあるということも伝えたくて、我々は本書を出版した。

●「黄金のベンガル」に縛られた過去

バングラデシュは英領時代からパキスタン時代に至るまで、ジュートや米を中心とした農業を担うことが

求められた。長い間、黄金色のジュートや米が豊かさの象徴であったため、バングラデシュを含むベンガル地域は「黄金のベンガル（シヨナル・バングラ）」と呼ばれた。

しかし、農業に根差した繁栄が、逆にバングラデシュを農業に縛りつけることになった。英領時代には、ジュートの紡績・織布工場さえ東ベンガル（後にバングラデシュとして独立する）には立地しなかったし、パキスタン時代には西パキスタン資本が東パキスタン（東ベンガル）経済において支配的であった。さらに独立後は、それらの西パキスタン資本による工場の多くが国有化の対象となったため、バングラデシュの工業化はなかなか進まなかった。一九七〇年代後半のジアウル・ラフマン政権、一九八〇年代初めに成立

したエルシヤド政権へと移るにつれて、徐々に呪縛が解けていった。

●縫い合わされた工業化

一九七〇年代半ばから、東アジア諸国のアパレル・メーカーが、欧米に課せられた輸入数量制限を逃れるために、代替的な生産基地を探していた。一九七〇年代末には韓国企業がバングラデシュ企業と提携したり、バングラデシュに工場を設立したりして、輸出向け縫製業が興った。それまで工場労働には全く動員されなかった女性労働力を活用し、一九八五年に輸入数量制限をアメリカ、カナダから課されるようになった後も、輸出向け縫製業は右肩上がりの成長を続けていく。

●群れに追いついた雁

縫製業に代表される労働集約産業に牽引される形で産業発展を開始し、その後、電気機械の組み立てや、その部品の生産へと業種を拡大していくという発展パターンは、先導国に続き、雁が連なって飛ぶように発展を後追いすることから、雁行形態型産業発展と呼ばれている。バングラデシュは一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて輸出品に占める衣服の割合が四分の三にまで高まり、製造業に関しては、輸出向け縫製業のモノカルチャー（一つの産業が支配的な経済）とみられていたのがあるが、本書の出版を考えるようになった二〇一〇年代前半には、輸出向け縫製業が国際競争に勝ち残ったことから得られた自信が、靴を含む革・革

製品産業、家電産業やIT産業や製薬産業、ひいては造船業（船の解体ではない）の顕著な拡大を導いたことが明らかになっていった。一九八五年に渡辺利夫の名著『成長のアジア 停滞のアジア』（東洋経済新報社）において、「停滞のアジア」の代表として位置づけられていたバングラデシュが、遂に東アジアの雁行に追いついた感がある。

●次は何でシヨナル・バングラ

バングラデシュはそもそも、人口が一億六〇〇万人ともいわれる人口大国である。一人あたり所得の上昇につれて、国内市場が拡大していくことが必定である。事実、拡大する国内市場に、家電やバイク、加工食品、医薬品、ITサービスが供給され始め、スーパーなどの小売業も目に見えて伸長している。このような工業化の拡大を牽引したのは地場の企業グループであったが、日系企業などの外資もバングラデシュの可能性に注目し始めている。

本書はこのような新しいバングラデシュの産業化の動きを捉えて日本の読者に紹介する、バングラデシュ産業の入門書である。かつて米やジュートで黄金に輝いたバングラデシュが、今後、世界のなかでどのような役割を果たし、新たな輝きをみせてくれるのか、我々著者達自身がとても楽しみにしているのである。

（やまがた たつふみ／アジア経済研究所 国際交流・研修室、むらやま まゆみ 同 新領域研究センター）